

## 子宮けいがんワクチン(HPV ワクチン)

このワクチンに関しては、平成 25 年から積極的な接種勧奨を差し控えていました。令和 3 年 11 月 26 日付けで「積極的な勧奨を差し控えている状態を終了させることが妥当」という旨が国から通知されました。数多くの検証や議論がされました。「安全性について特段の心配が認められない」「有効性が副反応のリスクを明らかに上回る」との判断です。

すでに、保健センターから無料接種対象者(小学校 6 年生から高校 1 年生までの女子)にワクチンの案内資料が順次郵送されています。子宮けいがんワクチンの効果、ワクチンの副反応についてよく理解して接種の判断をしていただくための案内資料です。

子宮けいがんの主な原因は HPV(ヒトパピローマウイルス)の感染が考えられています。このウイルスは、女性の多くが“一生に一度は感染する”といわれるウイルスです。一部の人でがんになってしまうことがあります。日本では毎年、約 1.1 万人の女性が子宮けいがんになり、毎年、約 2,800 人の女性が亡くなっています。患者さんは 20 歳代から増え始めて、30 歳代までにがんの治療で子宮を失ってしまう人も、毎年、約 1,200 人います。

子宮けいがん予防にはワクチン接種と 20 歳からの検診が重要です。イギリス、オーストラリアなどでは女の子の約 8 割がワクチンを受けています。

HPV ワクチンの効果として、子宮けいがんの原因 HPV の 50~70%を防ぎます。

HPV ワクチンのリスクとして、接種を受けた部分の痛みや腫れ、赤みなどの症状が起こることが多くあります。筋肉注射という方法の注射で、インフルエンザの予防接種等と比べて、痛みが強いと感じる方もいます。参考までにコロナワクチンも筋肉注射です。まれですが、重い症状が起こることがあります。ワクチンが原因となったものかどうかわからないものを含めて 1 万人あたり 5 人です。

今、日本で使われているワクチンは 3 種類あります。どちらも 3 回の接種を受けます。公費負担のないワクチンもあります、医療機関や保健センターなどと相談されて種類を決めて下さい。

通い慣れた医療機関で接種を受けることを勧めます。患者さんと医師が相互に信頼関係を築き不安のない状況で受けて下さい。

この内容は厚労省 HP を参考に作りました。興味のある方は厚労省 HP をご覧下さい。